

---

# I(いかん)S(そいつには手を出すな)

まっちゃん

---

## 注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS (そいつには手を出すな)

### 【著者名】

NZマーク

### 【作者名】

まつちゃん

### 【あらすじ】

これは、ACfAとISのクロスオーバーっていう分類にはいるのか？

【アーマード・コア（AC）】と呼ばれる、人型の兵器を駆る青年の話である。作者はACfAとISの知識はかなり中途半端です。違う点があれば遠慮なく指摘してくださいまあもちろん、亀更新です＝）

## chapter 1 - 1

## プロローグてきなにかだと思つかな？（前書き）

新しく書き始めました。ネギまーのほうの更新がとまつてますが、  
ストックが切れたのでもうしばらく時間が掛かりそうです。

この小説は見切り発車です。相変わらず亀更新です。作者の独自  
解釈、独自設定が飛び出す可能性がたかいです。

そういうのが苦手な方はプラウザバックを推奨します。

## chapter 1 - 1 プロローグてきなにかだと思つかな？

この地球上には幾つかの大陸がある。

地球最大の大陸、ヨーラシア大陸に始まり、アフリカ大陸、北アメリカ・南アメリカ大陸、オーストラリア大陸に、南極大陸。そして、近年発見された【ヴォルシオーネ大陸】

この最後の、ヴォルシオーネ大陸はここ最近見つかった新しい大陸で人類の新たなフロンティアとなるはずだったのだが、現代までその大きな大地を隠してきた技術力は遙かに今までのものを大きく上回る。

その大陸の位置は太平洋のど真ん中にあつた！！

貿易をせずに発展してきたこの大陸では世界がインフィニット・ストラトス、通称「IS」に関心を示すよりも前に似たようなものがその大陸では普及していた。

それは【AC】<sup>アーマード・ロー</sup>と呼ばれる、人型の兵器だった。

今現在のヴォルシオーネ大陸では次世代機「NEXT」が主流になっていた。

その大陸に存在する多数の企業、企業に支援されて始めて稼動する「NEXT」。

そんなヴォルシオーネ大陸を治めているのは一つの国

企業主義国家「ヴォルジヴァーナ」

これはその「NEXT」を駆る青年の話である。

chapter 1 プロローグ てきなにかだと思ひ

目の前には見慣れた砂漠が広がっている。

砂漠には廃墟が多くある、今いる場所はそんな廃墟のひとつ「田ピースシティ」は俺が自分の機体「NEXT」の『サヴァン』のテストに用いられる場所だ。

今田も相変わらず企業連から引っ越し切り無しに  
「新しい装備ができたからテストしてみてくれ」なんて言われてテ  
ストをしている。

これがまた面倒なんだよ。この前なんか適当に了承してたら  
「この前の装備の感想を（「」）なんて催促が酷いたらありやしない。

仕方ないから適当に返事してきた装備を使ってみて感想をメールで  
「簡潔」に送っている。ただ一言「ロマンが足りない」とか「見た  
目が悪い」とかetc. . .

どの企业も特化型の武装やら装備しか送りてこないんだよな  
汎用型のやつは作らなくていいのかなとか思つたけど・・・放置で

そんなこんなで今もテスト中

今俺が使っている機体は確か、「四脚の中量机のデータが欲しい」とか言われて

スタビライザーやゴツテゴツテついた機体に乗つてるわけですよ。  
しかも名前が、「四脚・グリント」って・・・どうなのそれ、安直  
過ぎない？

それにテスト中というかACに乗つてるときはその搭乗している機  
体名で呼ばれる。

つまりは『「四脚・グリント」、どうだ？機体に問題は無いか？』  
・・・」となる。

なんか、いや。まあ、次からは「かつこ」という名前をつけて欲しい」とでも

感想で送つてやるつかと思う今日この頃です』

『おい、「四脚・グリント」！それは後にしろ！今はとりあえず武装の試射をしてみる』

「アーッ解」

えっと、武装は両腕に超遠距離スナイパーに背中にも超遠距離スナイパー？

は？意味が分からぬ

『目標は1・5キロ先に表示されるターゲットだ。全部弾を使つまで終わらないからな。さつさと撃つてしまえ』

「・・・・ア解」

オペレーターさんも大概呆れてるな。仕方が無いといえばそつなんだけど・・・

実はこの機体は今ある機体の発展タイプとして送られてきたものらしいんだが、あまりにも元の機体から離れすぎている上に明らかに名前負けといつ。

・・・「グリント」は「閃光」って意味合いだぞ？

その機体を四脚にした上に完全に支援機としての武装しか積ませないつて、どうこいつなの？バカなの？死ぬの？

とか思つてゐるうちに全部撃ち終わつていたようだ。

『おい、あまりむちゅくちゅに扱うなよ。後々お前が使うのだから

な

毎日送られてくる装備の数々はテストした後は大概そのまままでテストしたものになっているのが現状だ、わかってはいるのだが聞き返さずには居られない

「えつ？これも？」

『ああ、それもだ。まだ山ほど（他の武装が）残ってはいるがな』

「はあ、あんなに気楽に受けた自分が憎いよ』

そついつても送られてくる装備は減らないむしろ毎日増えてる・・・  
ので、機体をハンガーに入れて「四脚・グリント」から降りる

とりあえずは、抹茶ラテでも飲もうかなと思ひながら  
食堂に向かって歩いていると急にアナウンスが鳴った

『風見 幽史。急いでオペレータールームに来い。』

「呼び出しかよ、抹茶ラテは・・・飲めないか

そう一言残してオペレータールームに向かった

このアナウンスが青年の人生を大きく変えることになるとまつたく思つてないかつたのであつた

『風見 幽史。急いでオペレーター室に来い。』

「呼び出しかよ、抹茶ラテは・・・・飲めないか」

抹茶ラテが飲めないのを悔しく思いながらオペレーター室に向かう。その背中はどこか煤けていたと整備員が言つていたことを彼は知らない。

### SIDE・幽史

空気圧の抜けるいい音と共にドアが開く。大小様々なモニター やキーボードの上に雑に置かれたヘッドセットがまず目に入った。

「ん? 幽史か。少し話がある」

そういうて椅子をくるりと回して体だけはこちらに向ける女性の髪は背中の中ほどまで伸びるパープルで先端が少しウエーブが掛かっている

彼女は俺の専属のオペレーターの霞スミカさんだ。彼女は辛辣な口調が多く、こやいや俺のオペレーターをやっているのかと最初は思つたがそれもまたミッションをこなすうちに俺に対する心遣いが見られることが多くなってきたので俺はいわゆる「シンデレラ」というやつかと納得している。

「現在お前にミッションがきてくる

「えっ？ ミッションならいつも通信だけで企業の仲買人が通達してくれるやつでしょ？ 何でスミカさんがそれの代わりをしてるのか分からないんですが」

「ああ、それはなこのミッションが最重要機密だからってのもあるが一番大きいのは……」

そこでスミカさんは一皿の葉を切った。

「ORCA旅団としての共同ミッションだからだ

ORCA旅団として？

「疑問に思つていいようだから一応は説明しておく…

そしてスミ力さんの大雑把な説明を聞いた後、もう一度ミッションの概要を聞いた。

ミッションの概要を説明します。

島国「日本」が日本を射程距離に収めているミサイルが全機発射されました。今回のミッションはそのミサイルを日本に一発も落とさないように迎撃してください。作戦領域にはVOBでミサイル郡の後ろから数を減らしつつ、首都、東京近海の上空にて反転攻撃を仕掛けることになっています。

このミッションは衛星軌道掃射砲「エーレンベルク」を使いミサイルを全て落とすのが目的です。エーレンベルクは今回のミッション用に小型化されています。このミッション後はあなたの好きにして構わないそうです。あなたが単機で先にミサイルがある程度落としておいてください。そのほうが後が楽でしょう。

またすでに所属不明機体が迎撃しているようです。不明機と「コンタクトを取り、出来る様なら協力してミッションを完了してください。

これは、ヴォルジヴァーナの存在を世界に知らしめる重要なミッシ

ヨンになります。企業連はあなたを高く評価しています。良い知らせを期待します。

との事らしい。Hーレンベルクを小型化とか、何をするつもりなんか一小時間聞いただしたいところだが、まあいい。今はこの作戦に集中しよう。とりあえずはハンガー（格納庫）に行かなければな。

『機体のチェックは済んだか?』

「ああ、後はVOBの接続を待つだけだ」

今現在は険しい崖に作られたカタパルトにて出撃の最終チェックをしている。今回のミッションはほとんどの確率で空中戦が予想される。機体にはかなりのEN効率とリンクスのENの節約が重要となるミッション中にEN切れで落ちました、とか洒落にならんからな。よって、仕方がなくEN効率がいい「四脚シリーズ」を使うことにした。

『VOBの接続始める』

「了解

機体からモニターを通じて様々な情報が映し出される。

VOB接続開始

メインブースター異常なし

サブブースター、スラスター異常なし

腕武装、異常なし

背中武装、異常なし

肩武装、異常なし

システムオールグリーン

「これから四脚グリント。いつでも出れるぞ」

『了解。では行つて来い』

VOBを待機状態に移行させ、十分にエンジンが温まったところでカタパルトの枷を外す。

機体がカタパルトを飛び出し、体制を整えたところでVOBが爆発的な加速を始める

VOB巡航モードに入ります

さて、後は作戦領域付近に近づくまでは時間の余裕ができるぞりとて緊張の糸を切るわけにはいかない。さて困ったものだと思い始めたたら急に機体から声が掛かった

『マスター、暇そうですね。話し相手くらいにはなりますよ?』

「...?」

『あれ?マスター私の存在を知らなかつたんですね?』

「...ああ。初めて聞いたな

『じゃあ、自己紹介です。リンクス支援型AIのミクです』

「ああ、ようしゃべり。」

『うすやすくべり』

企業連め、また良く分からん機能を積みやがつて.....

だがあ……嫌いじゃない。

『マスター、作戦領域に入るよ』

「了解」

前方の青い空には黒い点が見えてきた両腕の突撃ライフルを撃てる  
ようにトリガーに指をかける

『作戦領域に入へ、良し。後は好きにミサイルを落として行け。出  
来るだけ落としておけ、後が楽になるぞ』

その言葉のあとすぐにミサイルが射程距離に入つた。トリガーを引  
く、ミサイルが爆発。

『マスター、エーレンベルクのチャージをしないと反転した時に撃  
てないですよ～？』

「Hーレンベルクのチャージを開始」

『Hーレンベルクのチャージを開始するよ、2分くらいかかるかな』

「了解」

背中に積んである小型Hーレンベルクの平べったい砲身から淡い水色の色を放ちつつチャージを開始する。

と、うか何気なくチャージ開始したけど、不明機とコントクトとつてないな…でもまあ、今からしないと使えないし。終わつた後にしょつか、そうするか。

『マスター、そろそろミサイル郡を越えるよ』

む？、思つたよりも長く考えていたようだ。見ると田の前にはかなり数を減らされたミサイル郡がある、考え方をしていてもある程度は撃ち落としていたか…

そう思つている間にミサイル郡を完全に追い越した。そこには機体と同じ以上の大きさの刀を持つた白い騎士がいた。

『VOB使用限界近いぞ VOB使用限界！VOBページ！』

バシュツ！

VOBが外れて速度が一気に落ちるがまだ完全に落ちきる前にQTクイックターンをして勢いを遠心力に変換して体勢を整え、白い騎士のよつな機体の隣に機体を寄せる。

「誰だ！」

まあ、いきなり現れたら警戒くらにはするよな……

「ヒカラリンクス。味方だ。警戒するな……といつても無理があるか。まあいい。これから広範囲殲滅攻撃を行う。巻き込まれたくないから後ろに下がってい」

SHDE・千冬

私は親友の束に頼まれてこの束が作った【ヒシ】、白騎士に乗つて日本に向かってきているミサイルを落としている。

私がある程度ミサイルを落としていると白騎士のレーダーが奇妙なものを持ち上げた。それはミサイル群を追うように高速で飛びながら

接近してくる白い四脚の変態な構成の機体だった。その機体は肩が淡い水色に光っている。否、背中の武器が肩上部を通して前面に銃口を向けているそれは5mもある大きな薄い板のよつなものだった。だがなんで光っているだけなんだ？しかも銃口から銃身にかけての銃のかなりの部分がただ淡い水色に光っているようにしか見えない。手に持ったマシンガンで手当たり次第にミサイルを撃ち落しながらこちりに飛んでくる。

「束！あの機体は何だ！？」

「わからんないよお～でも私は作ってないよ？」

束と通信していると件の機体が思つたよりも近くによつてきている。

「誰だ！」

そつ言つとその機体はど～か疲れたよつな雰囲気を醸し出しながら通信してきた

「ひづらリンクス。味方だ。警戒するな……といつても無理があるか。まあいい。これから広範囲殲滅攻撃を行う。巻き込まれたくないかつたら後ろに下がつていろ」

『五一ちゃん、危なそりだから下がつてよつよ』

「…………了解

「どうやら知らず知らずのうちに気が高ぶっていたようだ。」この由騎士には銃器は積んでいないので束と四脚の蹄の通りに下がっているのがいいのだが、

「こんな変態な機体で壊せるのか？」

と疑問に思ってしまう。が、それも肩の淡い水色に光る薄い板のようなものから放たれるエネルギーで

全てのミサイルが落ちていく光景を見て疑問は吹き飛んでしまった。

「ミッション完了」。おい、ミサイルは全部落した。そりゃほんとすらんだ?」

今はミサイルが全部落とされ青々しい空が広がっている。それも2、3分のことですぐに戦闘機や戦闘ヘリ、海には軍艦等が大量に出てきた。

「どうやら各国は今しがたミサイルを全部落した俺達を捕まえようとしているみたいだが、逃げれるのか?」

『「うちには、ステルス機能がついているから関係ないね』

「それはよかつた。なら早く行け、俺はやる事が残っている」

その言葉を聞いてから私はステルスマードを起動した

『ちーちゃん、気になるのは分かるけど後にしよう』

『分かった、これから帰る』

そして私は誰にも見つかっちゃこ無事に帰ることが出来た

SHADE OUT.....

SHADE・幽史

良し、帰ったな。それでは追加ミッションを始めよ!、今回は田標  
が一つあった。

一つ田は不明機  
ひとつ飛行機の騎士のよつな機体  
と可能ならミサイルを撃墜すること。これは今終わった。そして  
一つ田、むしろこれが本題と言つても過言ではない。

、ヴォルシオーネ大陸の存在を全世界に知らしめること

であるこれは、ミサイルを落した俺達を各国は必ず自國のものにしようと動いてくるのは明白だから『追いつかれない程度に距離をとつてヴォルシオーネ大陸近海まで誘き寄せる』。これをするだけで俺の役割は終わりだ。

あとは大陸に掛かっていたＥＣＭを解除してもらえば軍艦なりなりのレーダーで大陸が発見されるだろう。

そうすれば各國の馬鹿共は新しく発見した大陸に自國の領土を持つと入ってくるだろう

まあ、そこは消してそこは新たなフロンティアではなく圧倒的な技術力を誇る

変態共の巣窟だと絶望することになるだろうがな



遅くなりました

## SIDE：幽史

あの後、やはり外の国々はこのヴォルシオーネ大陸の存在に気がついたようだ今まで追いかけてきた軍勢はそのまま侵略でもするつもりなのだろうか。

だが、ヴォルジヴァーナも黙つて自国の領土を侵されることを許すはずがなく企業連のお偉いさんたちのお茶会で撃退することを容認した。撃退にはリンクスアームズフォートとAFアームズフォートを何種類か出すことに決定した

AF  
アームズフォート

それは企業の連中が経済戦争をしていた頃の話までさかのぼる。企業は始めACアーマードコアに当時の全技術力を注ぎ最強の人型兵器を作った。だが、その機体達はある一部の人間しか扱うことが出来なかつた。その機体を扱う人ことを【リンクス】と呼んだ。【リンクス】は企業の最重要戦力として位置づけられていた。企業は【リンクス】が自分達の言つことを聞く飼い犬だと思っていたが【リンクス】としてはたまつたもんじやなかつた。最初は企業の手先として戦い中で喜びやストレスを発散していたが、一部の過激派は手先であることには不満を感じ暴走した。暴走した【リンクス】により企業は壊滅的

なダメージを受けた。

それ以来、企業は貴重な戦力を一個人に委ねる事を良しとせず代替可能な多くの人員で運用できる戦力を目指した。それが機種によっては全長7kmに迫る超大型機動要塞AFである。

凄腕の【リンクス】たちは圧倒的な戦力差に物怖じすることなく、AFに単身で勝つことが出来るものまで現れた。

【ジャイアント・キリング】は奇跡の親戚に過ぎないものであった。

現在侵略する気満々な軍勢は俺の眼下にいるAF群が見えてないのだろうか見えてないだろうね、レーダーには俺の機体しか映ってないと思うし。まあ、それも仕方がないさ、このヴォルシオーネ大陸の周囲50キロメートルには超強力なジャミングと対ネクスト用のECMが展開されている

迎撃に使われるAFは【ギガベース】【ステイグロ】【イクリップス】の3種類で数は5：3：10の割合で参加している。

【ギガベース】は箱型の双胴船体を持つ拠点型のAFでキャタピラによる地上走行能力と海上航行能力を有し、主砲は射程距離と命中精度に優れているが基本的に装甲が薄めであることが弱点であると

いえよう。今作戦では大火力の主砲で航空部隊を墜としてもりつ

【スティグロ】は水上戦用AFで射撃兵装はミサイルのみだが大推力のブースターと大型レーザーブレードによる突進は軍艦を一撃で沈めるだけの破壊力を併せ持つ。

また、大型レーザーブレードを射出することも出来る。

今作戦では海上を動き回って敵を攪乱しつつ軍艦を撃破してもらいう予定だ

【イクリプス】は円盤に翼が生えたような形状の飛行型AFで大出力のハイレーザーキヤノンとミサイルを装備する。ハイレーザーキヤノンは機体下部に設置されており、360度旋回することであらゆる角度へ攻撃することが可能である。

円盤の真上に対する攻撃手段を持つていないため上空から【ギガベース】と同じく航空部隊を狙つてもらう

『マスター、幾らなんでもこれは敵が可哀相ではありますか？』

ま、まあいくら凄腕のリンクスでもこの戦力差をひっくり返すには無理があるつ、撤退を推奨すべきな状況だな。明らかにオーバーキルといったところか、哀れな。

「そう言つた、これもミッションだ。確かに企業連は張り切つているとしか言へん戦力だが……」

まあ、すでに銭は投げられた、いまさら止めまい

諸君は、この「ヴォルジ・ヴァーナ」が世界の表舞台に出るための生贊となつてもらおうか

運がなかつたと思って諦めてくれ

結果的には白騎士事件の勢いのまま追いかけてきた軍勢は明らかにも過剰戦力としか言えない様なAF郡と謎の白い四脚の機体によつて壊滅状態になつた

これを気に今までその存在を隠してきた新大陸【ヴォルシオーネ大陸】を国土とする企業主義国【ヴォルジ・ヴァーナ】の存在とISの製作者である篠ノ之 束の「ISにはISでしか勝てない」を信じ

るほかなかつた。

国連は白騎士事件の3日後に新大陸【ヴォルシオーネ大陸】と企業主義国家【ヴォルジヴァーナ】の存在を世界放送で流し、世界中の人々が認知した

chapter 1 - 3

過剰防衛（後書き）

主人公の口調が安定しないなあ

困ったもんだ

## chapter 1 - 4 変態ヒカル魔改造の結果（前書き）

初めて感想をいただきました。

嬉しかつたです

これからも（更新遅いですが）頑張つてこきますのでよろしくお願いします。

あの白騎士事件のあとに行われた全世界対ヴァルジヴァーナの大戦はヴァルジヴァーナの圧倒的勝利で幕を下ろした。

その1週間後にISの製作者と白騎士の搭乗者と会う機会があった。その時に製作者と企業の変態達は意気投合し、ISの技術をほぼ全て教えてもらうことになった。

そして、その1ヶ月後にはヴァルジヴァーナを恐れた国連がヴァルシヴォーナと提携して新しい機体の製作を持ちかけてきた。これには国連の「今のうちに提携を組んでおいて、技術を盗もうぜ」という意図があった。…が、ヴァルジヴァーナはそれがあることも承知で一つ返事で了承。

国連と提携を組んで作る機体は国連側は一切手伝わないそうだ。それと変態達が気が乗らないとか言って作業を後回しにしているのもあって何も出来てない。

そしてヴァルジヴァーナの変態達が2ヶ月も頑張ったおかげ?でISの技術をACに組み込んだ機体が完成した。

これはACに申し訳程度にISの技術が使われた機体だった(割合

がAC : HS = 8 : 2)

使われている技術と言えば、【拡張領域】【浮遊型コニシト】【シールドエネルギー】【絶対防御】の四つだけであり、その他はまったくACと同じであった。

四つの技術を組み込むだけなので今ある機体に組み込もうとした。

それはもちろん、ヴァルジヴァーナのパイロット、【風見 幽史】である。

そして変態達は調子に乗り、今度はHSをメインにACの技術を組み込んだ機体を作った。

この機体は1号機とは正反対な（割合がAC : HS = 2 : 8）機体になってしまった。

しかも、HSをメインに作ったのにも関わらず拡張領域という初期装備以外の後付け装備を機体に載せる物が限りなくゼロに近いのである。

しかも初期装備が近接特化型の変態機である。

企業は1、2号機のパイロットを決めるために会議を開いた。

1号機は全員一致で【風見 幽史】に託す（押し付ける）ことになったが

2号機は、搭乗できる者がいなかつたので見つかるまでお蔵入りになつた。

パイロットの問題はあつと/or間に解決したので、議題は1号機つ

まつ

【風見 幽史】の【サヴァン】にHISの技術を組み込むついでにいろいろ積んでみよつぜ。といつ傍迷惑なものになった。

この議題は2週間にもおよんだ。

そこで企業連は変態達に「いい加減まともな機体を作れ」と今更な通知を出した。

変態達は、仕方がなく国連との提携機を作ることにした。しかし、乗り気ではないのでその作業は遅々としたものだった。

といつわけで俺はしばらく企業連に愛機を預けておいたのだが、なんか魔改造されて帰ってきた。

しかも突然持ってきて「今から起動テストして！」とか

頼んでも無いのに嬉しそうに機体の説明を始めるし、なんかあんたらのテンションにいける気がしないんだけどさ。

もう何かISの技術が積まれてて、拡張領域って言うの？アレがなんかあるから今まで押し付けられた装備類が全部入るとか、いつも張ってるPAと追加でもう一枚にシールドが張れるようになつたとか、

何かシールドENつていう新しいENを消費する代わりに、搭乗者がダメージを受けない機構とか機体をいつも身に付けられる様に待機状態（現在は時計、ちなみに左手首に付けてる）とかいう機体をコンパクトにする機能を追加してみたとか機体色を勝手に紅に変更したからとかどうなつてんの？

これ、俺が乗るの？といつかミクが心配なんだけど…。

アイツまで魔改造されてたら俺リンクスやめるからね。

ちなみに、あの白騎士事件の時の機体は【四脚シリーズ】の中でも  
『今ある機体を四脚にして再構成してみようぜプロジェクト』の一  
号機だからあれの機体構成は別にあっても今後乗ることも、見る  
ことも無いだろ？……いや、そうであつて欲しい…。

と、とりあえず起動してみようか  
えっと…？念じれば起動するとかなにそのUFチックな起動方法…  
四脚の紅い機体をイメージ…

一瞬俺を光が包んだと思ったら、紅い装甲が俺の体にくっ付いてい  
る…この俺の周りを浮遊してるゴツい盾っぽいのは、えつ？…ソ  
ルティオス砲を埋め込んだ実体シールド？  
分離飛行も出来る？もう他には無いよね？後は前送った装備と同じ  
？今まで送った機体構成が全部入ってる？しかも展開はイメージし  
たら出てくる？さつき聞いたよ、聞き逃してたけど…。  
といふが、またイメージかよ…。

ISの技術ってイメージすること好きだなあ。  
まあ、装備が「ゴテ」「ゴテ」になつて動けないとか、見た目が麗しくない  
とか  
よりはマシか…。この基準が真つ先に出てくる時点で俺も…い  
つ、いや。まだ大丈夫な範囲だ！

取つ合ひへず//クの安否を確認しておひつかな…。

ミクへ届たり出でおいで?

『マスター！お久しぶりです。』

「ああ、久しぶり。何も変なことされてないよね？」

『？特に何も無いけど、マスターに会えなくて寂しかったです。』

「や、そつか。なら良かった。」

なんか前より性格が人間に近づいてない?  
まあそのほうがいいけどね

とりあえず今は、この機体に慣れる事から始めようかな。



あの後魔改造された俺の新しい機体に慣れるために、様々な機動を試したり、今までの戦闘と同じことが出来るかのテストをしていた。

そのテストの一環で戦闘AIと模擬戦をしていた。戦闘AIの名は【ラインの乙女】。これは企業が自社の変態達に 機体のテスト専用に作られたもので対峙した敵機の機動時における微弱な電磁波を感じて行動に移すという半ば反則染みた戦闘AIを作れ。

という意味分からん指示を

電子系が得意な企業の変態達は5日という中の技術者達が泣きたくなる様な短時間で作り上げたものであり、変態によつて作られた始めての戦闘AIなのである。

ちなみに、こいつにはまだ一回も勝ったことが無い。

いつかは勝てると踏んで出来るだけこいつに挑んではいるが未だに負けた戦闘データと武装の稼動データが大量に手に入るという結果しか得られていない。それが悪いことだとは思わないし、無駄だとは思わない……が一回でもいいから変態の作ったものには勝ちたいと思うんだが、

うまくいかないものだな。

そんな感じで機体に慣れるためにいつも通り【ラインのN女】と戦つていたある日の出来事である。

俺はまた何時ぞやの如くオペレータールームに呼び出された、また抹茶ラテを飲めなかつた……

オペレータールームに到着すると見覚えの無い人物が3人いた。青い少年と黒い男と白い美女である。…………それといつものツンデレ鬼もいる。

青い少年は、キヨロキヨロと部屋を見回して落ち着かない様子だ。瞳も髪も青色だった。瞳は透き通るような青色で髪も青色でシンシンに立たせていた。服もカジュアルな服装であるがやはり青色である。

黒い男は、腕を組んで壁にもたれている。一度ドアの音に気づいてこちらを見たがすぐに目を閉じた。もう何もかもが黒色だった。瞳も髪も服装も全てが黒で統一されていた。彼の醸し出す雰囲気で数々の修羅場を経験しているとすぐ分かった。リンクスだろうか……？新しいパイロットか？

白い美女は、

チラチラと黒い青年を見ている。

瞳

は金色で髪は白色だつた。服装は他の一人とは違つて瞳や髪の色を含わせずにふつくしい服装をしている。

で?」の人たちは誰だ?

「ああ、幽史来たか。こじつらは『ロニー・アナトリア』の傭兵とそのオペレーターとおまけだ」

「おまけじゃないぞ、東風谷 速希つていう名前があるんだぞ!」

青い少年がツインテレ鬼に詰め寄るが相手にされてないな。すると、白い美女が名乗った。

「フィオナ・イエルネフェルトです。彼はレイヴンです。」

レイヴンと呼ばれた黒いやつはもう一度目を開いてこちらを見た。ただそれだけだった。まあ、そういうやつもいるだろうとあまり気にしなかった。

「良かつた、あなたが機嫌を悪くしないか心配だつたんです。彼は出会つた時から無愛想で……」

そう言つてレイヴンを責める様な目で見る。すると、レイヴンはどこか申し訳なさそうな雰囲気を醸し出し始めた。……意思疎通が

出来ないわけでは無いから、何問題はないか……？

「で、そのアナトリアの傭兵とのオペレーターはどうしているんだ？」

「ええ、それは何のことで」

そう言つて速希を見る。

「この子は私達がアナトリアを去るときに無理して着いてきたんです。私達はこれからラインアーチの【ホワイト・グリント】の候補として各地を転々としなければならなんですね……。」

「こつ（速希）をここに置いて行へつもりか……」

「なるほど、それでここが居てはいけないショーンの妨げになると感じたか。さすがに今企業が作った機体が一機空きがあるんだが、そいつに乗るか？ 速希とひづる」

「俺は、レイヴンに憧れて着いてきたんだ。少しでも近づけるのなうまく使こなせよっ！」

「その心意気や良し。お前の乗る機体はかなりペーキーな機体だ。

「ああー任せとけー！」

こうしてアナトリアの傭兵は新しい機体【ホワイト・グリント】に乗り、アナトリアの傭兵に憧れた少年は企業の変態達が作った機体【ブルー・ウインド】に乗ることになった。この速希の乗る機体はこの大陸では珍しい珍しい機体であった。

そして、速希が自分の機体に慣れてきてミッションをある程度こなして、<sup>アームズフォート</sup>AFを一人で破壊できるようになった頃

いきなり企業連が幽史と速希に対してある依頼を出してきた。それは

日本にある、エリ学園に入学したことのことだった。

企業連は

『このところ特に戦争も無く、平和な時代が続いている。

平和はいいことだが、どうも技術力が伸び悩む。技術力を伸ばすためだけに

戦争をしても差が開きすぎてほとんど伸びないだろう。

そこで、ISDという新しいものから何かヒントを得ようと考えたわけだ。

それに君達は学校に行つてないだろう? 一度行つてみればいい。

出来れば、ISDの情報も取つてきてほしいがね。』

と言つてどうしても行つて欲しいみたいだし、断つたとしても強制的に通わせるつもりみたいだつたけど……。

その話をハンガーで愚痴つたのが間違いだつたか……変態達が餞別代りとかそういう名目でいろいろ変態な装備を送りつけてきた。しかも、全部拡張領域に入れてある。とか何なのその新しいイメージは……

そんなわけで俺と速希は急遽、E.S学園に入学することになったのであった。

「女だらけの学園に男が2人……いや、3人か……」

『マスター、私が付いてます。』

「学校があー、どんな所なんだろうなあ？」

「どうせろくな場所ではないさ……。」

感想もらいました。

感謝感激です^

これからも更新遅めですが頑張って書いてこやすんじゃらしくねがいします。

## chapter 1 - 6 新型AFのお披露目（前編）

「」の小説には「変態」の要素が含まれます。

まあ、いつものことですが…。

補足！ 乙樽と輝美は双子です！

俺らはEIS学園に入学することになった。が、今すぐでは無かつた。さらに条件が付けられた。

それは、「EISを男が動かせたら」というものだった。

え、これ入学とか無理じゃね？

むちやくちやな条件が提示されてからかなりの年数がたつた。まあ8年くらいたつたんじゃないかな?

この8年でいろいろなことが起こった。

まず企業がかなり動いたな。起業したり壊滅したり。

とりあえず企業の紹介でも軽くしておこう

有用性の高い、秀才君的な設計の【ローゼンタール】  
ここは世俗的な認知度は高いな

真っ当な天才君みたいな【オーメル】

デザインが微妙だったが【レイレナード】の技術者が合流してからはなかなか格好いい機体を作るようになった

あくまで実戦重視の【アルゼブラ】  
ここは機体は生物みたいに丸っこい

神経質なまでに精密さを求める【BFE】

でも多脚系の機体が多い、精密さを求めるところ脚になるのか?

ロマンたっぷりの【有澤】

ここは武器は通称「温泉ウェポン」と呼ばれる、大艦巨砲主義

レーザー分野に強くて曲線ラインが綺麗な【インテリオル】  
ここはEN技術をいくらかISに転用している

ミリタリーチックで頑丈でダンボールな【GA】

けどEN武器には弱いな、実弾には強いが

「ジマニアロマンを求める【トーラス】

まあここは機体も変態的だな、ソルディオスを作るぐらいだし

解体した技術者が集まつた【ラインアーチ】

来る者は拒まずの姿勢を貫く企業だな、ホワイトグリントが属する企業もある

ラインアーチの部署たち

「ジマの申し子の【アクアビット】

コジマ技術のメックとでもいづべきか

解体後は半分が【トーラス】に合流し、残りは【ラインアーチ】で

細々と研究中

レイレナードとは仲が良い

速さを追い求める【レイレナード】

速希がよく使うといだな、ここも解体後は半分が【オーメル】に合流し、

残りは【ラインアーチ】で細々と研究中。【アクアビット】とは仲が良い

生態兵器を可愛がる変態企業と名高い【キサラギ】

…もう何も言つまじ、と言つかよく分からん、閉鎖的だからな、あの企業は

まあ、こんなところか。ああ、キナ臭いついでに解体していったのはどの企業も変態すぎて他の企業から『自重しろー』の声と一緒に攻撃した結果壊滅した企業ばかりだ。が解体しても本社は残つており、実質解体というよりは営業自粛（強制的に）が一番適切な表現だろう。

唯一【キサラギ】だけは本社も徹底的に破壊された。  
そのため現在は【ラインアーケ】内で活動中、と言つても『AMIDA』とか「のを廢てるだけになつて」いるが。

それは企業としてどうなのか？とか疑問があえてスルーの方向で行くこととした。

触らぬ変態に祟りなし、だな。

そして  
IS学園に入学することとかすっかり忘れてた頃にそれは起つた。

変態達が「新しいAFを作ったよ！試しに 乗ってみてね」とい  
う馬鹿げたメッセージが俺と速希の元に届いたことに始まつた。

「新型AFのお披露目？」

「どうせあの変態達だまとも事をするわけがない。ほら、見てみる『乗つてみてね』と書かれてる。AFは代替可能な複数の人間によつて制御されるものであつて俺らリンクスが個人で動かすことなど……」

ヴォンツ

田の前の空間にディスプレイがSFチックな音と共に現れた

『フツ、甘いな風見』

「だあ！びっくりしたじゃねえか！」

「そうだ、いきなり出でてくるのは感心しないな

『それは悪かったね。本題に戻るけど、今回は風見の機体に今ある全てのAFの完成系を載せた』

「ほお？いつ載せたのか問い合わせたいが後ににしてやろうか。で？」

『そしてそれらは君のワンオフ【リアルタイムアセン】によつて展開が可能にした。安心してくれサイズは本物よりかなり小さめに作つてあるよ。あれはISに対しても大きすぎるからね。それとこつちが本命なんだが、AFを全部まとめて一機にしてみたんだ』

「えつ？あのAFをまとめた？どうこう」と、

『まあ、実際に見てもらつたほうがいいだろ？他のリンクスはもう用意はできるみたいだからね。とりあえずは旧ピースシティに

来ても「ひがつかな『』

「了解」

「えつ、幽史行くのかよ?」

「行かんと始まらんだろ。」

やつ言つと幽史は速希を置いて歩いていった

「…幽史、怒つてるのか?」

そんな疑問が過ぎたが

「ちよつー!俺も行くつてー置いてくなよ

とつあえずその疑問の答えは後回しにして  
速希は幽史を追いかけて走っていく。

## 旧ピースシティ

周りはもう放置されてから何年経ったのか分からいくらいに風化したビル群が立ち並んでいる。

そこに現在、ヴォルシオーネ大陸にいるリンクスが勢ぞろいしていた。

### カラード部門

ランク1 オツツダルヴァが駆るステイシス

「貴様ら、準備できているな？」

ランク3 ウイン・D・ファンションが駆るレイテルパラッシュ

「やっぱリンクスとしては一流だ、新しい機体でどれだけ戦えるか見せてもらおう」

ランク7 ロイ・ザーランドが駆るマイブリス

「マイブリス、いけむぜ あんまり氣は進まねえがな」

ランク9 アナトリアの傭兵が駆るホワイト・グリン

「……。」

ランク16 有澤 隆文が駆る雷電

「正面からいかせてもらおう、それしか能がない。すべてを焼き尽くすだけだ」

ランク17 CUBEが駆るフライジール

「では、後はお任せということです」

ランク18 メイ・グリンフィールドが駆るメリーゲート

「正面からいくわ、細かいのは性に合わないの」

ランク19 ド・スが駆るスタルカ

「ハラショー！」

ランク20 エイエープールが駆るヴェーロノーク

「弾幕張るのはまかせてください」

ランク22 カースが駆るサベージビースト

「マッハで蜂の巣にしてやんよ」

ランク24 ドン・カーネルが駆るワンドフルボディ

「経験も、素質も、すべてが違うんだ」

ランク27 パッチ、ザ・グッドラックが駆るノーカウント

「分かつていい。やる」とはせねや」

ランク28 ダン・モロが駆るセレブリティ・アッシュ  
「自分で言つのもなんだが、役に立つと思つぜ」

ランク30 チャンピオン・チャップスが駆るキルギーザー  
「じゅうつけああああ！」

### ORCA部門

ランク1 マクシミリアン・テルハーデールが駆るアンサンブル  
「やはり、腐つては生きられぬか」

ランク2 ネオニダスが駆る円輪がちりん  
「変態どもめ、きつい仕事を押し付ける」

ランク4 オールドキングが駆るリザ  
「H - m thinker トウートウトウートウトウ  
I - m thinker トウートウトウートウ

ランク5 真改しんかいが駆るスプリットマーン

「…期待…」

ランク6 ヴァオーが駆るグレーティッシュニア

「ハッハー！」

ランク7 メルツヒルが駆るオープニング

「…変態どもが 死んで治るものでもあるまい…」

「ほんとに勢ぞろいだな。えっと、20人?」

「よほど暇だつたんだな、たかがAFを見せるだけなの。いや、待て。これだけのリンクスが集まると言つことは試しに撃破しろといつのか?」

「えつ、なに? AF撃破すんの?」

「もしかしたらな」

『リンクスの諸君、よく集まつてくれた。

今回は新型AF【ギガスピリットオブアサルトアンサー・ジョン】の性能テストに集まつてくれて感謝する。では早速始めるとじより』

新型AFの名前を聞いてリンクス達がざわめく

が、変態は無視した

『風見、上空でAFを展開してくれ』

「了解。だが、何故上空まで上がる必要がある?まさか【アンサー】のよつな形状なのか?」

『よく分かつたね。新型AFは【アンサー】をベースに作つてあるから上空で展開しないと折れるんだよ、いろいろとね』

「分かつた」

とにかく上空に上がればいいんだな、【サヴァン】を展開してそう考えると同時に紅い四脚の機体を身に纏いブースターを吹かして上昇を開始する

『だいたいそのくらいでいいよ』

声がかかつたときは高度が2500mもあった

「こんなに機体をデカくしてどうする、この力では対戦としては使えんぞ」

『それは大丈夫だよ、戦を今は想定していないからね。これが終わったら調整するよ。じゃあ展開してみて』

目の前にディスプレイを開き目的の機体図面を探す

あつた……何だこれは？明らかに重量過多じゃないか

…まあいい展開したら解ること、展開しよう

そして俺は光に包まれた

光から開放された俺の身を覆っていたのは確かに【アンサラー】をベースとした  
ナニカだった

腰から【アンサラー】の羽や【マザーウィル】の羽が6枚ずつ生え  
ており  
スカート状になっている。

羽には【アンサラー】の傘下への攻撃を完全に防ぐ新型防御機構の  
EN兵器と【マザーウィル】の垂直発射式ミサイルランチャー（コ  
ジマミサイルを含む）や機関砲を搭載。

背中と両肩から少し離れたところに策敵用の高性能レーダーが積ん  
であり、背中と両肩のレーダーはフレームでガツチリと操縦者をホ  
ールドするようになっている。両肩のレーダー付近のフレームから  
は【アンサラー】の長方形のコジマミサイルポッドがあり、その端  
は【ギガベース】の主砲の小型タイプが積まれている。実はこの主  
砲は取替えが可能でマザーウィルの主砲（小型）やヒーレンベルク  
(もちろん小型)に取替えが可能らしい.....。

そして【アンサラー】の中央ブロック部分に乗つて いる格好になる。ちなみに中央ブロックは球体である。乗り辛いとおもつたのだが、存外機体制御がしっかりしているおかげでなんともない。使われているのは全部【グレートウォール】の装甲を起用しているため、生半可な攻撃ではビクともしない。

そして頭には申し訳程度にヘッドセツトが装備された

何だこの変態チックでロマンを積み込んだAFは！？

## chapter 1 - 6 新型APIのお披露目（後書き）

感想を何件かもらいました。

ありがとうございます。

感謝感激です！

ちなみに作者はACはFAがメインで4は一回だけストーリーをORMAでクリアしただけなので4や4以前の知識はかなり浅く間違いが多く見受けられると思います。

遠慮なく言ってください。

これからもよろしくお願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8723x/>

---

I(いかん)S(そいつには手を出すな)

2012年1月5日23時49分発行